

# 京鹿子

平成三十年六月一日発行  
通巻一二六号(毎月一回)日発行



6月号

鈴鹿呂仁

拾掬集 その三十三



沖へ沖へ未だ蜃気楼抱けず  
羅針盤にぎる背後の蜃気楼  
姉川へ辿る三叉路落し角  
日輪のつつむ我が影花洛の忌  
狛犬の片<sup>か</sup>方<sup>た</sup>への愁ひ樟茂る  
牡丹散る決裁済みの印五つ

捨石のなき碁盤の目夜鷹啼く  
夏はじめ白い魔球の羅<sup>ロ</sup>府<sup>ス</sup>の空  
花園は己が手中へ燕反る  
点在の寺領の安堵松の芯  
塔頭の花の名残りや隠れ茶屋  
きぬかけの衣の名残り余花の寺  
花蟲の放免の空百花揺る  
新緑の彩なせる光ゲ水琴窟

---

近詠

鈴鹿 仁

花桐

花桐に雲は自在の絵となりし  
夏鯉の跳ねて和を是かく禅ごころ  
袈裟懸けの僧の闊歩や松の芯  
この郷のすべてを領りし桐の花  
秒針のしずかなリズムみどりの夜



—  
近 詠  
—

和田 照海

春告鳥

琴材のよく乾く日や梅若忌

引鴨へ日和つづきの湖平ら

首無地藏ふた摩りして春告鳥

ふらここををとこ漕ぎして島を発つ

花山に骨董市に長煙管



松本 鷹根

花 影

三門や春風駘蕩天に反る  
群れ灯す命の性や蚩烏賊  
草餅を買うて白寿の姉悼む  
花影を辿り湖国の浮御堂  
花影に刻を委ねて湖眩し



## 近 詠

塩貝 朱千

勾玉池

八つ橋を叩いて渡る蓮浮葉  
初音して勾玉池は空の碧  
朧夜の鏡にアガサクリステイ  
初蝶や逢ひたさ募るそはか句碑  
惜春のヴィオロンあすへ旅立つ娘

# 英華採集

雛壇の鏡の中にあるわたし

三原松 井 鶴子

かなり木格的な雛人形等が飾られており、幾世代も継がれている雛壇に違いない。父母から約束させられた訳でもないが、例年どおり今年も決まった場所に飾られている。ふと、その部屋にある鏡を覗くと雛壇に自分がいるような錯覚を感じた作者。父母と過ごした幼い頃の楽しかった雛まつりの事が蘇ったのであろう。父母への追懐の想いが色濃く滲んでいる作品である。

薄氷を溶かす寝息を聞いてをり

東京高 島 正比古

人それぞれの家庭の中には、大なり小なりの問題を抱えることが多い筈である。季語の「薄氷」は、問題の深刻さではなく相手の立場を考えた時に肉親であれば乗り越えられるもので、きっかけ、タイミングが合えばどちらからともなく歩み寄れるものである。作者の心の機微を上手く捉えている季語の選択と言える。寝息を聞く作者の安らぎと安堵感が伝わってくる。

春うららすすつてんてんの博打の木

光尾 荒 尾 かのこ

「すすつてんてん」とは、金や財産を全部失った状態即ち一文無しと言うことであり、「博打の木」は樹皮が十センチメートル程度のうろこ状に剥がれ落ちるところから比喩としてそう呼ばれている。「すすつてん」と「博打の木」の相関関係に囚われやすいが、「博打の木」の葉から「ばくち水」と呼ばれる液体を採れば鎮咳、沈静の薬が出来ることを考えれば綺麗さっぱりとした心の状態になり春らしい気候を楽しんでいる作者の姿が見えてくる。

# 神麓集

風信子 藤岡紫水

五線譜に託す慕情や風信子  
老いてなほ夢に艶あり桃の花  
奥飛驒のとある茶店の桜餅  
しやぼん玉空にぶつかり消えにけり  
指漏るる一握の砂浜麗ら

著莪の花 沼田巴字

野宮に竹伐る音や著莪の花  
天下人の名をよるこばず青葉道  
悪を為すことのなかれと夜の雷  
蜘蛛の囿の真綿となりて吹かれをり  
空梅雨や毬の形の整はず

夜桜 丸井巴水

眼底に落暉の重る花洛の忌  
花吹雪維新へ二つ田の字宿  
自販機の遠慮なき音春の風邪  
天守無き堀に柳の絮うかれ  
夜桜の白さ悪魔を寄せ付けず

花洛の忌 植村蘇星

八合目急ぐなの声花洛の忌  
八合目未来を語れ桃の花  
桃の花好かれ惹かれて八十路かな  
うららかやなべて句材の丘に立つ  
木の芽吹く眼聴耳視や丘に立つ

# 神麓集

待春の門 北川孝子

しつとりと立つ待春の建礼門  
一語得てなほ一語欲し梅一輪  
あの事もこの事もゆめ花洛の忌  
初ざくら浮き立つものに膝がしら  
ためらひも荒びも見せて四月来る

薄氷 直江裕子

かたちから春に口角上げてみる  
薄氷にかざすこれから先のこと  
二ヶ月のてのひら昏い海がある  
はじめての老いなんですものお雛さま  
白い地球とび出して舞ふスノーボード

春一番 高木晶子

春寒し日記を読むは音を消し  
いくばくの夢を果して猫やなぎ  
今寿には一輪挿の猫やなぎ  
神木を身軽にしたり春一番  
桃色の思ひを八重に雛飾る

花の江戸 伊藤希眸

沈丁の鞠花はじき地震去りぬ  
雨上がる春暁に鳴くゴロスケホー  
春愁や掌と掌にはさむ名もなき草  
さくら観る箸持つ膝の崩れずに  
口上は襲名三代花の江戸

# 神麓集

薇 奥田筆子

薇の回転不足に惑ひあり  
望楼は明治の輪郭冬赤芽  
母といふ静かな水位冬の鷺  
白さざんか背面跳の空気かな  
寒晴や水際窓際眠り際

春生るる 村田あを衣

底冷えの底よりあふぐ比叡かな  
捨つるもの捨て白梅へ歩をとどむ  
針穴へ通す絹糸春生るる  
下萌やベビーシューズは蝶結び  
芽吹風乗せ七彩の観覧車

トロンボーン 井上菜摘子

雛段や颯のみな冥くあり  
梅咲いてキャッチコピーなど要らぬ  
笑ひ合うてその後を疎遠貝母咲く  
立春の水なみなみと水瓶座  
立春の野に置く終のトロンボーン





# 京鹿子集

## 鈴鹿呂仁選

繩電車たんぼぼ広場で折り返す

京田辺 山中志津子

身上は打たれ上手や鬼やらひ

如月の噂消えたり弾んだり

彼岸へと胎内くぐり出れば雪

土筆煮る試練の日々も糧として

たんぼぼ吹いて母と不思議な距離にゐる  
京 都 井尻 妙子

母恋やたんぼぼの径折り返す

鳥帰る振らぬと決めた別れの手

紅白の梅の手招き通りやんせ

紅梅へさびしきボンと裏返す

日の波紋風の波紋や草萌野

城陽 鷺山 珀眉

前方後円墳醒め蝶の空

芽吹きどきメトロノームは止めないで

春昼の角より溶ける角砂糖

日永かな風のソナタの杉木立

人声の去り春風の軽さ知る  
京 都 片山 熙子

早春の黄色のひとつ曰ゴッホ展

囀りや川は気ままに青信号

木の芽和へ及ばずながら母の味

早春の息は空色クラリネット

雪の軽ろさ水の重さとなりにけり

福 山 亀井 福恵

干細魚焙りて海の香をたたす

耕人の嘗ては企業戦士かな

祇王忌や愛憎つねに闘ぎあふ

浮寝鳥湖の眠りをいざなへり

亀甲の松は天指す野風呂の忌

蒲公英やぼつぼ元気な隣の子

料峭や鍵じやらじやらと旅準備

橋立を一文字にして風光る

遠くすみ観世音の深おもひ

福 知 山 西村 滋子



雛段の鏡の中に居るわたし

京雛を飾りて開く日本書紀

行き交ひし人もはなやくひなまつり

一段はひひなのお菓子三段重

薄氷を溶かす寢息を聞いてをり

一晚の雪に三晩の雪見酒

三 原 松井 鶴子

東 京 高島正比古

街角のシヨコラの甘き二月かな

紅梅や予測のつかぬ道半ば

春つららすすつてんの博打の木

梵鐘の余韻の中や梅ひらく

万蕾の雨に烟るや臥龍梅

啓蟄の犇めく土や雨あがる

穀雨かな作物日誌の筆の跡

異国にて剪定の音故郷を恋ふ

光と影ウチハサポテン冬の暮

シングルマザー児とボール蹴る春ごころ

アメリカの冬の天気や雪もやう

白き雪空からチラチラ降りはじめ

目ざめれば見渡す景色雪白し

部屋の中明るくなりて雪景色

行くまいか行かうか迷ふ今朝の冬

冬の雪アンテナ壊し立去りぬ

降りつづく雪降り残す墓石かな

雪囲解く難問を解くごとく

初春や大波来たる人類史

孫呼びて英語音読初稽古

抱かれて児は夢の中寒の入り

任終へて裾野くつきり雪の富士

荒 尾 荒尾かのこ

アリソナ 伊吹 之博

オハイオ 水谷 直子

酒 田 藤波 松山

さいたま 神田 惣介